駅まで10分の道のり

沙希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
駅まで１０分の道のり

【Ｎコード】
Ｎ０４６７Ｓ

【作者名】
沙希

【あらすじ】
就職活動中の伊藤果歩は最近、思い悩むことが多かった。就職活動はうまくいっている。しかしこれでいいのだろうかと、もやもやが晴れない。そして果歩は、彼氏との関係も上手くいっていないと感じていた。この二週間、こまめに連絡を取り合っていたはずの彼氏との間にメールも電話もなかった。（本作品は以前、別サイトにて発表していたものを転載したものです）

なんだかなあー。
私、これでいいのかな。

新鮮な外の空気に触れた途端、私はそれを吸うではなく、体の中の毒素を吐き出すかのように大きなため息を吐いた。
黒のスーツにきつめに縛ったポニーテール。
真面顔で――――いやもしかしたら悲愴な顔で、私は今まさに出てきた高層ビルを見上げた。
テレビＣＭでその名前を聞かない日はないだろう有名な企業の東京本社。
浮かない顔でそれを見上げる私は、誰がどう見ても就活活動が上手くいかない大学生だろう。
そしてそれは正しかった。

伊藤果歩、２１歳。
――――人生に悩む大学４年生の春。

＊＊＊＊＊

「果歩！佐々木商事の内定出たんだっておめでとう！！！」

そう言って私に抱きついてきた真梨子は大学で出会った一番の親友だった。

「……うん。はじめて内定出たよ」

「――――のわりには嬉しそうじゃないね。どうしたの？遼先輩と喧嘩でもした？」

覇気のない返事をする私の顔を真梨子は心配そうにのぞきこむ。

遼――――私の彼氏。

大学の二学年先輩で、サークルで出会った彼との付き合いはもう一年以上になる。

「喧嘩はしてないけど。しばらく連絡とってない」

遼と付き合う前から、彼のことを相談してきた真梨子は私たちに何かあるたびに、自分ごとのように一緒になって考えてくれる親友だった。
だからこそ真梨子には正直に言えた。

「……それ、私が突っ込んで聞いてもいいこと？」
「うん、大丈夫。全部話したら、真梨子に甘ったれるなって怒られそうだけど」

自分でもわかるぐらい私の言葉には力がなかった。
けれどこの想いを誰かにぶちまけてしまいたかった。
親友の優しさに、私は溜まっているものをすべて吐き出す。

「――――なるほど。就活の悩みもそうだけどそもそも最近、遼先輩と倦怠期なんだ。付き合って長いもんね」
「倦怠期って言うのかわからないけど。私……、就活で疲れているってのが大きいんだろうけど、最近自分のことが自分でよくがわからなくって。だから遼に話しを聞いて欲しくって、慰めて欲しくって……。でも遼ってあの性格でしょ？」
「真面目でいい人だけど、クソ真面目すぎて甘えさせてくれないってか」

私は苦笑して真梨子の言葉に頷く。

「それに……遼が前と違って私に興味ないように感じるんだ。だから余計に言いにくくて……、遼に連絡するのも億劫で……。気づけば二週間、音信不通」

世間一般で二週間、付き合っているカップルが連絡を取り合わないことが普通なのか、おかしいことなのかはよくわからない。でもこまめに連絡を取り合っていた私たちにとって、これは異常事態だった。

「遼先輩からは連絡ないの？」

真梨子の質問に私は首をふる。

答えはノーだった。

「私、このまま遼とわかれるのかな？」

「……」

「恋愛ってパワーがいるよね。就活で疲れきった私には遼とこれ以上続けていくの、無理な気がする」

口にしてしまったそれは私の正直な、……正直な今の私の気持ちだった。

「でも恋愛そのものがパワーになることもあるよ」

真梨子の言っていることは正しい。
でも、それは今の私たちには当てはまらない。

「付き合う前とか、付き合い始めはそうなんだろうね。けど真梨子の言う『倦怠期』の私たちじゃ、パワーになんてならないよ。ただ疲れるだけ」
「……遼先輩のことはもう好きじゃないの？あのね、果歩の言いたいことはわかるよ。でも……そもそもどうして遼先輩と付き合っているのか、……付き合いはじめたのか考えたほうがいいよ」
「……」

どうして遼と付き合ってきたのか。
どうして遼と付き合い始めたのか。
そんなの決まってる。

好きだからだ。

遼はものすごいイケメンってわけではなかったけれど、私には十分すぎるかっこいい男性だった。
何より真面目でしっかりとした性格が、一緒にいて頼もしかった。
私を気づかう優しさが愛しかった。
でも――――。

「ねえ真梨子、好きでい続けるって大変なんだね。私、知らなかった」

「果歩……」
「私、遼と別れるかも……」

するりと私の口からもれたその選択は、驚くほどすんなりと私の胸におさまる。
その道を選べば『解放』される。
そう思えてならなかったのだ。

＊＊＊＊＊

人の意思など簡単に覆されるもの。
『遼と別れる』ことを考えながら、いざ本人を目の前にするとそんな気持ちは薄れていく。

これは愛情なのか。
それともずっと近くにあったものに対する、執着とも言えるただの愛着なのか。

「え？お前、就活上手くいってないの？だってこの前、佐々木商事の最終面接まで行ったって言ってただろ？それに他の選考中のやつだって、何社も通ったって」

二週間、音信普通状態だった遼からかかってきた電話は『今日の夜、ヒマなら家に来いよ？一緒にメシ食おうぜ』というごくごくありきたりものだった。

ずっと電話もメールもしていなかったのに、当たり前のように一人暮らしの家に迎え入れられ、当たり前のように就活の心配をされる。
確かに前よりも遼はマメではなくなったかもしれない。でもこうやって心配をされると、すべてが杞憂のような気がしてくる。二週間、何の連絡もしない私に対して何も言ってこなかったのも、単純に就活で忙しい私に遠慮していてくれたのかもしれない。

「その佐々木商事、内定もらえたよ。今日、連絡があったの。落ちちゃったやつもあるけど、だいたいは進んでるかな」
「……それって上手くいっているってことじゃねえの？」

遼の反応は普通、なんだろう。それぐらいは私にもわかっている。
私より先に大学を卒業した遼は、今は電機メーカーの営業職だ。
日本中の誰もが知っているメーカーで働く彼はすごく忙しくって、社会人になってからは色んな意味でぐっと大人になった。
たった一杯のビールですぐに顔を真っ赤にするくせに、晩酌を欠かさなくなったのも社会人になってから。今だってスーパーで買ってきたお惣菜に、缶ビール一杯で彼はすっかりいい気分だ。

「だって、自分が行きたい業界は履歴書の段階で突っぱねられて、今受けているやつはどうでもいいっていうか、保険のつもりで出したやつばっかなんだもん」
「お前、それ友達に言わないほうがいいぞ。このご時世、ぜってーうらまれるぞ」
「言うわけないじゃん！こんなこと遼にしか言いません！」

むきになって言い返した私に対して、なぜか遼はニヤリと笑った。

「そうか、俺だけにか」

……すでに酔っ払っている遼は絶対、都合のいいように受け取っている。
遼の右手があやしく私のおしりを触り始めた。

「いてっ！！」
「もう！私は真剣に悩んでいるんだからねっ！！！」

右手の甲を真っ赤になるぐらいつねりあげてやって、私は思いっきり遼を睨みける。
ああ、でも絶対に効果はない。
酔うとすぐセクハラ気味になるのは遼の悪いクセだった。
でもあんなに思いつめていたのに、遼とのこんな他愛もないやりとりに私はとても安心していた。楽しんでいた。

「まあ、果歩の気持ちもわからなくないけどな。俺も就活の時は色々悩んだしな」

遼の言葉に、ふと私は彼の顔を見る。

「でもさ、今は苦しいかもだけど、とりあえず選考に進めるだけありがたいと思って頑張れよ。お前みたいな悩みを持っているやつは他にもいっぱいいるんだしさ。今悩んでいるやつには酷だけど、誰もが通る道だよ」

どうしてだろう。
上昇していた気持ちが一気に下降する。

「……それってとにかく我慢しろってこと？こんなもやもやしたまま就活続けろってこと？今は就活上手くいっているかもだけど、このままじゃ絶対に私、駄目になるよ。今日の最終面接だって、嘘

の、余所行きの笑顔浮かべて、思ってもいない志望動機を語って、……皆そういうものなの！？」
「そうだよ。皆そうして社会に出るんだよ」

酔っ払っていたはずの遼の顔は真剣だった。
真剣だったが為に、まるで私がおかしいと言われているようだった。

「……わかった。そうだよね。遼が正しい。ごめん」

私の心を占めたのは遼への失望だった。
遼が言っていることは正しい。
そんなことは私もわかっているのだ。

私は荷物をまとめ、立ち上がった。

「……おい、どこ行くんだよ」
「今日はうちに帰る。来週の月曜締め切りのエントリーシート書かなきゃいけないから」
「ここで書いていけばいいじゃん。泊まってけよ」
「自分の部屋のほうが集中できるから」
「……そっか。気をつけて帰れよ」
「うん。ありがと」

就活用の真っ黒なカバンを片手に提げ、遼の家を出る。
遼の家から最寄りの駅までは１０分もかからない。

私は心の中で親友に語りかけた。

ねえ真梨子。
やっぱりもう、遼とも終わりなのかもしれない。
朝話した通り、そう思うのは今日が最初じゃないんだ。
この立ち並ぶコンビニやカラオケ店の明るさに照らされた駅まで１０分もしない道のりを、昔の遼は決して私一人で歩かすことはなかった。
夜道は危険だからと言って、必ず駅の改札まで送ってくれてたよ。

だけど最後に遼が駅まで送ってくれた日を、私は思い出すことができない。
思い出すことが出来ないぐらいずっと前のことなんだ。
もちろん社会人となり日々疲れている遼のことを思えば、当然だよね。
けど気づけばメールの量も、デートの回数も、遼とくだらない会話を交わす時間さえすっかり減っていた。
付き合いが長くなれば当然のこと。
倦怠期。
そうかもしれない。
でも私と遼の場合はそれが当てはまる？
ただ二人の気持ちが離れているだけだと、そうとしかもう思えない。

流れた涙を右手でぬぐい、私は駅の改札を抜けた。

＊＊＊＊＊

決心は固まった。

「……今言ったこと、本気なのかよ？」

「うん……」

モノトーンでまとめられた成人男性の部屋にはそぐわないキャラクターもののぬいぐるみを横目に、私は後悔する。
決心が変わらないうちにと次の日の夜、私は遼の家を訪ねた。
でもここに来るのは失敗だったかもしれない。
この部屋には思い出がありすぎる。
話しをするなら、遼を外に呼び出すべきだった。
身勝手だとわかっている。
でも、……居心地のいいこの部屋は決心を、鈍らせる。

「どうして別れるなんて……もしかして昨日、お前が就活で悩んでいるのにわかったような口きいたからか？」
「違うよ。まさか就活の愚痴で別れるなんて言い出さない」
「……でも」

遼の瞳が揺れる。
一方的な別れを切り出されても、遼が怒ることはなかった。
元々、温厚な人だったけれど、こんな時でも声を荒げることもないなんて。

「確かにあの時は正直、悩みを聞いて欲しいというより、ただ遼に慰めてもらいたかっただけってのは事実だけど」
「悪い。……でも皆、同じだろ？」

ああ、温厚だけれど、そうやって自分の意見を曲げない頑固なところも遼らしい。

そこが好きだったのだ、確かに私は。
でも、ずっとそんなんだったら、私は疲れちゃうよ。

「だからだよ」
「……」
「遼の言っていることはいつも正しいよ。間違ってない。でもね、そんなことわかっていても、ただ優しくして欲しい時だってあるんだ。就活のこと、私だってわかっている。皆苦しいのはわかってるよ！我慢しなきゃいけないことも！！！でも、苦しいんだもん！もう本当に気が狂いそうなぐらい、辛いんだよ！！！遼も同じように悩んだかもしれないけど、私、きっと遼が思っている以上にずっと苦しいのっ！！！だって、もう全部、そもそもどうしてこんな苦しいのかだってわからないんだもん！！」
「果歩……」

そう。
わかっているんだ。
私は贅沢者だ。
佐々木商事の内定を手にいれた私を、大学の友達は皆、あと一ヶ月もすれば私は就活とおさらばできると、うらやましいと言う。
でもね、就活をすればするほど、わからなくなるんだ。
本当にこれでいいのかなって。
好きなこと、興味があることを職業としている人は少ないってよく言うのは知っている。
けど、なんかそれって色んなことを妥協して諦めているみたい。

じゃあ、私の好きなことって何？

私が行きたいって思った業界は本当に私がやりたいことなの？
そもそも私がやりたいことって何だったっけ？

全部、よくわからなくなちゃった。
そしてそんな私に、ただ優しく声をかけて欲しかった。
遼に。
遼に優しくされたかった。

「きっと私、なんでもよかったんだ。遼が私に優しくしてくれるなら。別に直接、就活で頑張っていることを労わるんじゃなくても、くだらないメールを送ってきてくれるでも、ちょっと外に一緒にご飯を食べに行くでも、……駅まで１０分、手をつないで歩いてくれるだけでも……。なんでもよかった……。遼からパワーをもらいたかったんだ」
「……俺」

彼が口を開くのを遮って、私は叫ぶ。

「私もう遼と続けていく自信がない！身勝手だってわかっている。……ごめんなさい」
「俺は別れたくない」
「……でも、遼だって本当は『そろそろ潮時』だと思っていたんじゃないの？遼、最後に自分から私にメールして来てくれた日がいつだか覚えている？私は覚えているよ。もう二ヶ月も前だよ……」

遼の顔色が大きく変わる。

「この部屋にある私の物は全部捨てちゃっていいから。――――バイバイ」

私は遼の家を出た。
駅に向けて走り出す。
１０分の道のりがこんなにも遠い。
私は嗚咽を堪えることが出来なかった。

「おいっ！果歩！待ってっ！！！」

右腕を急に掴まれる。
見上げたそこには、遼がいた。
私は急いで涙をぬぐう。
自分から別れを切り出して、涙しているだなんて遼に失礼だ。

「果歩、……俺、お前と別れたくない」
「……」
「それから俺が『そろそろ潮時』だと思っているって言葉、訂正しろっ！俺はそんなこと、一度も思ったことない！！！」

紛れもないそれは怒声だった。

遼の声は私の鼓膜を震わす。
けれど彼の瞳は怒っているというより、悲しんでいるようだった。

「確かに最近の俺は……なんていうか……釣った魚に餌をやらないみたいな、そういう行動を果歩に対して取っていた。それは認める！けど俺は、俺はお前のことが好きだし、大学で出会った頃より、今のほうがずっと果歩のことが好きだ！」
「……でも」
「でもじゃないっ！俺はお前と今すぐ結婚してもいいぐらい好きなんだ！」

それはまるで絶叫だった。
けれど私は遼の言葉の内容に思わず呆けてしまう。

「あっ、いや、今のは……ってもちろん真実だ！俺の真実の気持ちだっ！！！」

私の反応に自分がプロポーズまがいのセリフを吐いてしまったことに気づいたのか、遼は顔を赤くし慌てて言う。

「……あ、ありがとう」
「お、おう。……で、別れるってのはナシでいいんだな」
「ううん。別れる」

私の即座の否定に遼は愕然とし、今の今までずっと掴んでいた私の右腕を離す。

「なんで……？」

「あのね、私……今でも遼のこと好きなんだよ。それは確か。でも私、遼との関係に疲れちゃったんだ。お互いに好きだけじゃやっていけないって、そう思う。だから別れたいって――――」

「好きだけじゃだめなのかよ」

再び遼が私の腕を掴む。

正確には今度は肩に近い部分の両腕を、がっしりと。

私の目をしっかりと見据えて、遼は言う。

「俺は好きって気持ちがあれば十分だと思う。お前が俺をまだ好きでいてくれるなら尚更だ。俺、今回のことで反省した。果歩のことが好きだから、反省した。大好きなはずのお前を、もっと大事にすべきだった。でもお前のことが好きだから、今度から、いや、今からお前のこともっと大事にできる。だって俺、お前のこと好きだから」

「……遼にこんなに好きって言ってもらったのはじめて」

それは思わずぽろりと出てしまった私の本音だった。

「つまり俺は今まで全然、お前に好きって口にして言ってなかったんだな」

遼は苦笑して言ったが、次は穏やかな笑顔を私に向ける。
私の腕を掴んでいた手を離し、右手で私の頬をなでる。

「よし。俺は反省した。『今』からはお前にもっと好きって言うようにする。メールもマメにする。いくら正論だからって、それでお前を傷つけないようにする。駅まで１０分の道のりをもっと大切にする。お前を絶対に一人にはしない」

それは熱烈すぎるぐらい、熱烈な言葉だった。
思わず顔が赤くなる。

「遼って、そういうこと平気で言う人だったんだね。何か遼に対する見方が変わったよ」
「何せ、俺は反省したからな」

少し茶目っ気のある言い方をして、遼は私の顔を再びのぞきこむ。
変わらず優しく頬をなでる大きな右手を、とても愛しく感じた。
強気な発言をしながらも、不安げにゆれる遼の瞳がとても愛しかった。

遼が好き。
この人が愛しくてならない。
なんて私は現金なんだろう。

でもこの気持ちは本物だ。

「遼は『今』から『釣った魚に餌をやる男』になってくれるんだよね？」

「もちろん」

即答だった。

私は自然に微笑んだ。

ねえ、真梨子。

『そもそもどうして遼先輩と付き合っているのか、……付き合いはじめたのか考えたほうがいいよ』

そう言ってくれた真梨子の真意が今ならよくわかる。

あんたって最高の親友だよ。

私は自分よりも背の高い遼を見上げる。

そして彼の唇にそっと口付けた。

今までで一番、優しく静かで、満たされたキスだった。

「……果歩、お前……」

遼はビールを飲んだ後よりも顔を真っ赤にし、口元を片手でおさえる。

「お前からキスしてもらったのはじめて」

そう言って恥ずかしがる遼に、私ははっとする。
『釣った魚に餌をやらない』のは私も一緒だったんだ。

遼だけじゃない、私もそう。
きっと駅までたった10分の道のりを私たちはもっと、二人で大切にすべきだったんだ。

でも今、それに気づけてよかった。

「エンゲージリング的なもの、今度買いに行くか？」
「えっ？気が早いよ！私、まだ一応学生なんだけど」

「いいじゃん。もう俺、プロポーズしちゃったようなもんだし」
「……あれがプロポーズなの？」
「……数年後に、やり直しさせていただきます」

つないだ手も心もすごく、あたたかいね。
私はたまらなくなって、彼の頬にもう一度キスをした。

Ｆｉｎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0467s/

駅まで10分の道のり

2011年10月8日02時27分発行